
この空の下、大地の上で

架音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

この空の下、大地の上で

【Nコード】

N0752BA

【作者名】

架音

【あらすじ】

気が付いた時、そこはどことも知らない深い森の中だった。ごく普通のサラリーマンであったはずの東雲晶はその混乱の中、己が無力な少女に成り果て、あまつさえ呆然としていたところを巨大な狼に襲われそうになるという異常事態の中、晶は一人の剣士にその命を助けられる。

異世界から訪れた少女（中身は成人男性）と一人の剣士の出会いが何をもたらすのか、それは誰にもわからない。

プロローグ

思わず取り落としたビニール袋が軽い音を立て、晶は自分がどれくらいの時間かはわからないが呆然としていたことによつて気が付いた。

目の前に広がっているのは、見慣れたはずの自宅周辺の風景ではなかった。

そこにあつたのは鬱蒼とした木々の連なりであり、鼻を刺激するのは濃密な樹木と土の香りであり、時折吹く風が木々の梢を揺らす音。端的に言うならば、東西南北もわからない深い森の中。

が、彼が借りている賃貸アパートの周辺には記憶をたどってもこんな濃密な森林などなかったはずであるし、そもそも普通に道路を歩いていただけでこんな場所に普段着のまま迷い込むわけがない。明らかに普通ではない異常な事態であり、そしてそれは周辺の環境ではなく晶の身体にももたらされていた。

「……、……！？」

呆然として、だからこそ何事かを呟こうとして無意識に唇を動かした晶は、今度は己の身体に起きている異変の一つに気が付いた。

声が……出ない！？

思わずその両手で喉を抑え、それから今度はゆっくりととりあえず50音を唱えてみようとかや腹に力を入れてから口を開く。

しかしやはり喉から声が出ることはなかった。

僅かばかりに出てくるのは、帯を震わせることのできなかった肺からの呼気が起こすささやかな風の音だけであり、何らかの意味を成す言葉も何の意味も持たない単なる叫びもついに形を成すことはなくそして……晶は己の身体に起こった異変が声だけでないことによりやく気が付いた。

おれの手じゃ……ない？

最初に気が付いた箇所は声を出そうとし続け、思わず急き込んでしまい、涙を目元に浮かべつつ口元を押さえることになった自らの両手だった。

まるで丈のあっていないぶかぶかのダウンジャケットからちよこんと飛び出している色白で、華奢で、可愛い指先。

それは、いくらデスクワークが中心であり身体を動かすのが得意ではないとはいえども成人した男性である晶の手では断じてない。

呆然としていた時間は、この森の中にいると気が付いた時よりも長かったのか短かったのか。

慌ててジャケットを脱いだ拍子に自分の頬をなでるのは、しばらく床屋に行く暇がなかったせいでやや長めになっていたとはいえ、腰まで届くほど長かったわけなどなく。

その自らの身体の異変に慄きながらも晶は半ば機械的に自分の身体を目で追い、小さくなった掌で触れながら確認していく。

明らかにだぶだぶになっているシャツとその上に着込んでいたスウェット。ゴムのおかげで腰の部分でかろうじて引っかかっているだけの同じくスウェットパンツ。締め付けが緩くなったせいで足首までずり落ちている靴下と明らかにサイズの合っていない靴。そし

て……

股間を押さえる掌には、あるべきはずのものの感触がない。

女の……身体だって？

一周してようやく落ち着いたのか、あまりの事態に精神が摩耗したのか、晶は平板な調子で呟く。もっともそれが言葉になることはなかったわけであるが。

ガサリ

背後から何者かが下生えを踏みしめる音が響いた。

ブログ（後書き）

初投稿になりますのでばちばち修正をしながら続けていく予定です。
当面の目標は週2回更新……できるといいなあ。

？・森

どことも知れない森の中から、晶が聞いたこともない不吉な調子を伴った獣のような鳥のような叫びが一つ、響き渡る。

それが収まると再び、まるで何かを確かめるかのようにもう一度、今度は小枝が折れる音がやけに軽い調子で晶の耳朵を打った。

「……！！！！？」

恐る恐る振り返った晶の前にあったのは巨大な　巨大な獣の姿だった。

それは恐らく……多分間違いなく狼なのだろう。少なくともイヌ科の生物であることは間違いない……と晶は思う。たとえその大きさが那須高原で見た牛よりも大きかったとしても。

無論そんな巨大な狼など晶は見たことなどない。

晶自身が見たことがある狼はTVの向こう側の映像であり、動物園の織の向こうにいるそれだけである。それでもこんな巨大な狼は晶の知る世界には存在していないし、記録があったとしてもそれこそジエヴォーダンの魔狼のような半ばおとぎ話のようなそれのようなものしかない。

あまりといえばあまりの事態に晶は目の前の巨大な生物を呆然と見上げ、獣の瞳を覗き込んでしまいそして、その場にへたり込んでしまった。

自分はもう、この獣の餌になるしかない

獣の瞳から放たれていたのは人間のそれとはまったく次元を異にした、そしてそれ故にどこまでも純粹で強烈な殺意。目の前の獲物を襲い喰らい自らの血肉に変えるという限りなく透明な野生の決意。

何をどうやっても逃げることはかなわない。

どういった理由や理屈、はたまた偶然が作用したのかはわからないが、少女になってしまっている今では……おそらく男の姿のままでも。

低くなってしまった視線の先にいる獣は無力な農奴を戯れに蹴る貴族のような、むしろゆったりとした足取りで晶にその身を寄せてくる。

その口元からだらだらと涎を垂らしながら。僅かばかりに興奮しているのか生臭い息を漏らしながら。

まさかこんな風に死ぬなんて思ってもいなかった……

晶は近づいてくる死神の体現のような巨大な狼をぼんやりと眺めながら、心の中で呟き、同時に祖父が亡くなった時の光景を思い出す。

最後の時は病院のベッドの上であつたが、両親と自分と妹。それから近隣に住んでいた幾人かの兄弟と親戚に見守られながら、大往生というのにふさわしい安らかな死であつた。

俺も爺ちゃんみたいな、いつかあんな風に死ねるといいなと思つてたのにな……

しかし今目前に迫っている死は、そんなとりとめのない夢想とは

正反対。見知らぬ森の中で、自分が自分であると示す身体はおおよそ信じられないそれになってしまい、見守るものもなく獣の餌となるような死。

知らないうちに両目からとめどなく涙があふれかえり、不意に股間が熱い液体でびしょびしょになる。

かすかに漂うアンモニア臭と、急速に広がる下半身の不快感に眉を顰め、こんな状況下で不快感を覚える自分の精神に思わず苦笑いを浮かべた時、どこから小さな風を切る音が響いた。

?・森(後書き)

R15 指定するの忘れてた…

ジエヴォーダンの狼は18世紀半ばにフランスに現れた狼?で詳しくはWikiでとりたいところなんですが、あれに乗ってない解釈も書籍であつたりするのでそこらへんは自己追跡してください。
一応ファンタジーなんで狼王口ボよりもこちらを引用してみました。

？・獣

それはほぼ同時に起こった。

右手前方から聞こえた小さな風切音に晶が耳をピクリと震わせ、弾かれたように狼が跳躍しようとして果たせず、その巨大な左後頭部に一本の矢が突き立つ。

直後、このどれだけの広さがあるのかも分からない森の隅々まで届くような、雷鳴のような咆哮がその罅から吐き出され空間を震わせる。その、あまりにも激しい怒りの色に染まった轟音に、晶は咄嗟には両耳を押さえきつく目を閉じて体を縮こまらせた。

直後ビシャビシャと音を立てて晶の小さな身体に降りかかってくる生暖かい液体は、狂乱の叫びをあげる狼の罅から吐き散らされる唾液か、それとも別の何かなのか。

なんなんだよこれ！なんなんだよもう！

形を成さない叫びをあげ、固く目を閉じ耳を押さえ震える晶の傍らに何者かが走りこんでくるような音が響き、金属同士が打ち合わさるような奇妙に清涼な音が耳を押さええる両手をすり抜けて晶の耳朶を打つ。

そこからはもう、嵐のような振動と騒音の大合奏だった。

そして晶自身にその嵐に抗う術は一つもない。

ただその場に蹲り、今この状況に置かれている自身の不運。自分の事などまるで眼中にないかのように命のやり取りをしている獣とその相手。自分をこんな場所に導いた何か。

それらもろもろに対しての呪詛をその役に立たない唇から零し、その数倍の罵倒を脳内で晶は繰り返す。

早く終われ！なんでもいいから早く終わってくれっ！……これが夢なら……！悪い夢なら……早く覚めてくれよ……！

そんな呪詛と祈りを繰り返し、きつく目を閉じ耳を塞ぎ蹲る晶に獣とその相手がどういった戦いを繰り返しているのかはわからない。かろうじてわかるのは、お互いのたった一つの命を掛け金とした戦いがその過程で引き起こす闘争の不協和音のみ。

悪魔のような狼の咆哮、固いものと柔らかいものをぶつかり合わせたような鈍い音、何かを引きちぎるかのような気味の悪い音、不吉な音色を奏でる獣や鳥の合唱。どちらの身体から進ったものか生ぬるい……恐らく血液が晶の身体にも飛び散り、その気持ちの悪い感触にも晶は体を震わせる。

限界を超える緊張から晶の身体は再び自分の身体から排出された生暖かいもので汚され、その一つ一つが、晶の精神を少しづつ削り取っていく。その過程で再び晶は自分の下半身が生ぬるいもので汚れるのに気が付いたが、そのことに心を振り向ける……獣に餌と見定められ、絶望的な死を自覚したあの時にあった僅かばかりの余裕もなく。

それ故、晶は嵐が終わったことにしばらく気が付かなかった。

「……？」

恐る恐る手を放した耳が捉えたのは、風が揺らす葉擦れの音、遠くから聞こえてくるとことなく愛くるしさを感じる優しい何らかの生き物の鳴き声。そんな優しい音の中に混ざる場違いな激しい息遣い。

しかしその呼吸音も段々と落ち着いたものに変わり、最後に大きく息が吐き出されて静かになり……

「大丈夫だったか？」

晶の耳に届いたのはやや気遣わしげな、よく響く男の声でありそして晶にも意味の通じる言葉だった。

……っ！？

晶は自分の耳を疑った。英語ですらろくに聞き取ることのできない晶にとって、意味の分かる言葉は日本語しかない。しかし……そんなことがあるのだろうか？ あんな巨大な獣の姿を見てしまったというのに？

……日本語……？ でも、なんで？ ここは日本？ 日本にあんな化け物がある土地がある？ けどでも……ええっ！？

あまりにも現実離れすぎる状況が続いた末に、届けられたありふれた言葉。それ故に晶は混乱し、それ故にそこにあるものを想像することができないまま男の声が聞こえてきた方に顔を向け……その凄惨な光景を視界に収めてしまう。

獣と男という二つの生き物が闘った結果が存在するその方向に。

4本あった足のうち2本を切り飛ばされ、倒れ伏している狼の腹は斜めに切り開かれ、黄色い脂肪のこびりついた赤く、黄色く、ピンク色の内臓がいまだに湯気を立てている鮮血のテーブルクロスの上に陳列されている。

今の自分の身体くらいの大きさの巨大な頭部の半分は抉られ、つ

ぶされており、灰色がったピンク色の脳が、眼窩から飛び出しているつややかな眼球とともに震えているのが見える。

呆然としたまま、晶は先刻まで自分を餌にしようとしていた獣をしばらく見つめ続け、……そしてその傍らにいた男にようやく気が付いた。

獣からほとばしったものだろう。その手には血にまみれた真つ赤な剣を握り、その半身を真つ赤に染め上げた男に。

命が助かったことで気が緩んだのか、鼻を突く生臭い血の匂いに酔ったのか、悪鬼もかくやという凄惨な男の姿に恐怖を覚えたのか。

それともそれらすべてが理由であったのか。

男がその血まみれでさえなければ恐らく魅力的に映るのだろう微笑みを浮かべるのを見たところで、まるで発条の切れたおもちゃのように晶はそのまま意識を手放した。

？・獣（後書き）

とりあえず晶君のトラウマになりそうな出来事はここで一旦終了。
今後もしろんなトラウマ事件は出てくる予定ですが。

かわいい主人公はいじめられて何ほです……よね？

？・男

背後から迫る獣の息遣い。

その息遣いに追い立てられながら晶は深夜の住宅街を走り続ける。どうして追われているのか、何か自分の身に大変なことが起こりそれが原因で追いかけている気がするのだがうまく思い出せない。走っている途中で履いていたサンダルは脱げてしまい、靴下だけで冷たいアスファルトの道を走らなければならなくなったことにも晶は眉をひそめる。道路自体は舗装されているから走りにくいわけではないが、それでも時折小さな指先ほどの石のかけらを踏んでしまいそのたびに走る激痛が、疲労とともに晶から逃走するための気を少しづつ奪って行ってしまう。

「誰か……っ！誰か助けっ……！！」

呼吸すら満足にできなくなりそうな状況下で、情けなくもまるで年端のいかない少女のような涙声でどれだけ繰り返したかわからない助けを求める叫びを再び上げるが、塀や垣根、フェンスの向こう側にある様々な建物から反応が返ってくることはやはりない。

……っ！？

不意に何かに足を取られ、走った勢いのまま草むらに倒れこんでしまった。その時どこかにぶつけたのか、手足を覆う肌理細かな白い肌のそここが血で滲み、あるいは青く、赤く腫れ上がってしまったっている。

しかし今はそんなことを気にしている場合ではない。早く逃げなければ、もしも追いつかれたなら今度こそ喰われてしまう。

そう思い、腰まで届きそうな長い髪を垂らす頭を何度か振って碎けそうな気力を何とか振り絞って再び走り出そうとした瞬間……目の前にそれはあった。

自分の事を喰らおうとする巨大な狼の頭。一度死んだはずなのに晶の事をあきらめきれなかったのか、ピンクがかった灰色のつぶれた脳みそを震わせ、右の眼窩から垂れ下がった眼球に喜びの色を浮かべて、涎をだらだらとたらしながら、逃げることも忘れその場に腰を落としてしまった晶のもとへゆつくりと近づいてくる。

「……」

絶望の果てゆえにか、晶の喉はついに声を発する力すら奪われてしまったようだ。本人は気が付かないまま意味のある罵倒と意味のない呪詛を音のないまま、いつそ可憐といってよい口元から獣だったものにひたすら投げつけ続ける。

無論そんなもので獣の歩みが止まるわけではない。

ひどくゆつくりと晶のそばにやってきた狼は見せつけるように、恐怖をあおろうとするかのようににだらと涎とどす黒い血を流しながら、上顎の半分が崩された醜悪で巨大な顎を大きく広げ……いきなりその巨大な頭部がまるで風船のように粉碎される。

その唐突な展開に、吹き出す狼の気色悪い血流を避けることもできないまま呆然とその頭の向こうに視線を巡らせそして……

目を大きく見開いた晶は、自分の身体がうまく動かないことに気が付いた。が、別に何らかの手段で拘束されているわけではない。ただ悪夢の内容がひどすぎて全身がひどく緊張していたせいだろうと自分で無理やり納得する。

その証拠に全身は熱を持ち、実際に心臓はものすごい勢いで脈打っているというのに、体の奥底は不気味に冷え切っている感じで毛布をぎゅっと握っている自分の両手すら思うように動かすことができない。

……毛布？

そんなものを抱えたまま外出する人間などいるのだろうか？少なくともコンビニに買い出しに行くためにそんなものを抱えていく人間はいないし、少なくとも自分は……

「気が付いたのか？」

手に握った毛布の裾を、眉を潜めて見つめていた晶の耳に、低くよく通る男の声が届いた。

慌ててそちらを見ると、こちらに背中を向けたまま……パチパチと何かがはぜる音がするということは焚火の前で何か作業をしているのだろうか？男は振り向きもしないまま言葉を続ける。

「“はぐれ”ならもう始末した。お前を囚にするような形になってしまったが……あそこから少し離れているがこの辺りはまだやつがねぐらにしていたあたりだから、一晩くらいはとりあえず安全だろう」

だから今日はこのまま野営をして、明日になったらここから3日ほどある　今回の討伐依頼をしてきた村に向かおうと、男は少女に告げる。

その言葉に晶は少しばかり眉を顰め、空を見上げた。木々のせいで太陽を直接見ることはできないが、まだ周りは明るいといって差し支えない。

今から焚火を始めるとか、薪になるものがもったいない気がするんだけど……

そんな晶の疑問を雰囲気だけで察したのか男はクツクツと笑いを漏らし、やや呆れながら理由を告げる。

「日が落ちる速さは多分お前が思っているよりも早いぞ？そして一旦日が落ちたら人間は何もできない」

まあ、お前と同じ妖精種なら星明りだけでも動き回れるんだろうがな。

男はそう言つと傍らに積んであつた枯れ木を一本火にくべる。

男の台詞に少女は困惑の表情を浮かべた。男の言葉から考えると今の自分はただ小さい女の子になっただけではなく、人間とは別な種族……白人から見た黒人種や黄色人種のような存在に思われているらしい。

けど、肌の色とかはそんなに変わらないような気がするんだよね。眼の色はわからないけど……ひょっとしてこの黒い髪がいけないのか？

なんとなしに長く伸びた自分の髪の毛を一房つまみ、しげしげと眺めてみる。が、長さは確かに伸びたがそれは平均的日本人が生まれつきもっている色であり、それがどんなふうの問題になるのかは見当もつかない。

ひとしきり髪を弄り回していた晶は一つため息をつくと右手で髪をかきあげ……その途中で体の動作すべてを止めた。

ええつと？

髪をかきあげる途中で右手に触れたのは当然右耳……であるのだが、その感触がおかしい。

県大会準決勝がせいぜいだったが、小学校から高校まで続けた柔道と多少かじった柔術。大学に入ってからやめてしまったが、その練習のせいで自分の耳はかなり変形していたはずだ。

けど、これっ変形っていうレベルじゃねーぞ！？

具体的には大きくなっている。詳細的にも大きくなっている。それはもうコントのできるマジシャンのあれよりも大きく、しかも上下に伸びているというよりも左右に突き出す感じで大きくなっているのは遺憾の限りであります。

あまりの事態にバカなことを脳内で口走ったことを晶はプルプルと首を左右に振ることでごまかし、小さくため息をついた。

確かにこれでは目の前の男と同種の人間であるとは言にくい。

確か、亜人間とかいうんだっ たっけか？

大学時代のサブカルチャーにやたら詳しい……まあ、重度なオタクであった友人が時たま妙なことを織り交ぜつつ熱弁していた異世界やらファンタジーやらの定番種族らしいエルフとかドワーフとか？　　そういうそれらの種族的特徴の一つに大きな耳……とかいうのがあったはずで、その扱いは作品ごとによっては人間の友人だったり敵対したりひどい場合は貴重な奴隷としての……売買対象だったり……？

冷や汗が一つ、背筋に沿って流れるのを感じた。

いやいやいやいやそう判断するのは早計だと思うし、仮にも命の恩人だよ？　狼さんのブランチになる予定だった女の子を……命がけで助けてくれた人だよ？　何の証拠もなしに恩人を不審者扱いするってのは男としてどうよ？

どちらかという人間としてどうだろうかと言われそうではあるが。

女の子の部分で地味にダメージを受けつつ、晶は慌てて男の評価に上方修正を入れてみるがどうにも自己内男擁護チームは今一つ盛り上がらない。

何しろ少女の考えている懸念自体はある程度の妥当性は持っているからだ。

それであるが故に、そして直接的な生命の危機から脱出でき、余裕が持てるようになったおかげで逆に『この先に起こるかもしれない』出来事に思考を向ける余地が出来上がり……暗鬱な思考の海に知らないうちに飲み込まれそうになっていく。

それを留めたのは、鼻先に漂ってきたのはほんのり漂う甘い香りだった。

「ルパの実の搾り汁に蜂蜜を混ぜて温めたものだ。美味しいぞ？」

男はそういいながら、呆けたような表情で自分を見つめる少女に向かつて湯気を立てるクリーム色の飲み物の入った木製の器を差し出してくる。

けれどまあ、蜂蜜はもうないんでそれだけしか作れなかったんだが……ひよつとして苦手なものだったか？いやまあ確かにルパの実そのものは食べたものじゃないのは知ってるが、搾り汁は十分飲めるというか……あゝと、どこに行ってもこいつは子供なら喜んでくれたんだが……

段々と自信を失っていく男の言葉に晶は慌てて首を横に振ると、男の手から器を受け取り……言葉が出せないのしばらく瞳を泳がせた後、深々と頭を下げる。

その仕草に男は何とも言えない複雑な……得心がいったような、憐れむようなそんな表情を少女が頭を下げた時に一瞬だけ浮かべ、何事もなかったように言葉をつづけた。

「そいつは冷めると格段に味が落ちるからな。早く飲んでみな」

男の言葉に少女はじつと手の中の器を覗き込み、恐る恐る口を近づけ一口すすり……いきなり頭をあげてびっくりした表情のまま男のことをじつと見つめてくる。

将来性満点な美貌の少女の猫のような、そして年相応に見える仕草に男は悪戯が成功したものの特有の笑顔を浮かべて見せた。

「美味いって言っただろ？さっさと飲んじまいな」

晶は男に向かってコクコクと頷きを繰り返すと器を傾けて、その熱さに時々顔をしかめながらゆっくりと、しかし一度も器から口を外すことなく飲み干していく。

わずかながら感じる酸味とかすかなイチゴのような香りが、男の言うルパの实の搾り汁なのだろう。それと蜂蜜の甘さが合わさっただけのシンプルな味なのだが、極度の緊張にさらされ続けてきたせいか、それを限りなく美味に感じてしまう。

あるいは子供に……少女の姿になったせいで味覚も変化したのかもしれない。

うっ……餌付けされてるみたいで癪だけれど……

ともかく、美味な甘味のせいでさっきまで抱いていた男に対するネガティブなイメージは段々と霧散してしまっていていつている。最初は何らかの薬品でも混ぜられているんじゃないかと警戒していたというのに、

警戒した方がいい。した方がいいんじゃないかなー。しなくちゃダメかな？……メンドクサー

くらいの勢いで警戒感がグングンと目減りしていくのを、自分の中にある冷静な部分は警報を鳴らしているのだがそれは全く役に立たないままで。

まあ、何があっても死ぬよりはましなんだし。

飲み終わる頃にはある意味究極の現実逃避的結論に落ち着いてしまい、自分でも気が付かないうちに緩みきってしまった表情のまま満足そうな吐息を一つ、漏らした。

「ところでだ、一つ確認しておきたいんだが」

なんだか無駄に愛嬌を振りまくっている少女を和やかに眺めていた男は、気を取り直して少女に尋ねた。

「お前、言葉が喋れないのか？」

？・男（後書き）

お正月？なにそれおいしいの？

な感じで年末年始を過ごしています。

結局三箇日休みなしなのは自分でもどうかと思いますが…

どうでもいいけどヒロインの相方^{になる}はずなのに男としか呼ばれない彼
の名前は多分次回明らかになるはずですきつと

？・名前

男の問いに、少女は一瞬狼狽したように視線を泳がせ、反射的に口を開こうとして……

それから諦めたような表情で小さく首肯した。

「そうか……それは生まれた時からか？」

フルフル

「つい最近になってからか？」

コクリ

「俺が……あの“はぐれ”と戦った後からか？」

……フルフル

「嘘がつけない性格のようだな」

4番目の質問の後の少女の仕草を見て、男は苦笑しつつそう言う。

一瞬思案するような表情になり、視線をそらせ、こっちをちらりと見た後頷こうとして、慌てて首を横に振る。

おそらく間違いなく少女は一瞬自分と“はぐれ”の戦いのせいで声を失ったということにして自分を庇護してくれることを求めようとして、途中でその行為に恥を感じて否定をした。そういうことなのだろう。

ええ、その通りでございますよ」

晶は、まるでやんちゃをした孫を見るおじいちゃんのような表情を浮かべている男の事をじっとりとした視線で見据えながら心の中で毒づいた。

自分が思わずとってしまった行動。それをどういう風に男が解釈したのか、同じ男である晶には手に取るようにわかる。

わからなかった方が精神的には楽だったかもしれないが。

「まあいい。とりあえず今日のところは休むことにしよう。詳しい話……質問は明日移動しながらでもいいだろう」

もう完全に日が落ちてきているしな。

男の言葉に少女は小首をかしげて見せる。

確かに大分薄暗くはなってきたが、まだ寝るには少し早いんじゃないのか？ 何か行動するのに支障はない程度には明るいはずなのに？

「さつきも言つたろう？ 人間は妖精種と違って訓練を積まないと夜目が聞かないんだ」

不思議そうな表情で自分を見つめる妖精種　明らかに古血統の特徴を体につく目の前の少女にはわからないのだろう。

まあ、それは仕方がない。世界から愛される妖精種でも、世界を見るには自分の目を使っしかない。そしてその目が映す世界は、ど

こまで行っても自分以外にはわからない。

「もう月が出てきている」

そう言つて男は空に向けて指を指し、少女はその指先に従い空を見上げ、そこにあつたものを見て何とも言えない曖昧な微笑みを浮かべた。

確かにここは、俺の知らない世界だ……

そこにあつたのは3つの月。

赤く輝く最も大きな下弦の半月、それよりもやや小さな蒼い満月。そして最も小さい白く柔らかな光を反射している上弦の三日月。

「特殊な訓練を積んだ……経験をつんだそうだったやつらなら何とかなるんだろうけれどな。俺のようなしがない剣士は魔法の加護でも貰わん限り、火の傍を離れて何かをするのは無理だ」

少女の表情をどう受け止めたのか。

男はそれだけ言つと、少女に背中を向けて座りなおした。それからおもむろに、少女一人くらいならすっぽり入りそうな背嚢をあけ、何やらごそごそと探りながら言葉をつなげる。

「先の事はともかく、俺は“はぐれ”のことを頼まれた村に戻り、そのの長に報告しに行かなくちゃならん。とりあえずその村までは一緒に来てもらつ」

来ないという選択はなしだ。お前、この森の中で一人で何とか生

きていくことなんかできないだろう？

男の言葉通り、晶にこの森で生きていく能力はかけらもない。特
技柔道程度の普通のサラリーマンがサバイバル技術などもっている
わけがない。

かといって、男の言葉に従うままでいいのだろうか？

多分、この男は自分に対してよからぬ考えを持っていない……と、
思う。というか持っていたらいろんな意味でまずいというか、ロリ
コンだったら死ぬ。そうじゃなければごめんなさい。

月を見上げながら晶はそんな殺伐としたことをぼんやり考えては
いるが、この男についていく以外にどうすればいいのか見当もつか
ない。

自分にはあまりにも選択肢……というよりも情報がなさ過ぎる。

ここがどこかもわからず、社会制度や人口や宗教………それどころ
か最も根源的な、何が食べられて、何が食べられないのか。そんな
ことすらわからない。

どこか大きな町や村まで行けば余剰な食料だってあるだろうが、そ
もそも貨幣経済が成り立っていないければ、物資の購入だって容易で
はない。

もつとも、無一文なのでそこら辺を気にしても仕方がないのだろ
うけれども。

それに、目の前の男と明確に違う生き物であるらしい自分の身体
も……今後どうやって普通の人間と接すればいいのか。

言葉が話せないというコミュニケーション上のハンディがある上にこの状況はどんな罰ゲームかと、少女は項垂れて小さくため息をついた。

そんな少女の態度をどう思ったのか、何とも思っていないのか。目当てのものを取り出したのか、男は焚火の前で座りなおし、何やら手作業を開始する。

何かを切る音、釘を叩くような音が時々響き、その音の間に薪がはぜる音が静かに混ざる。

それがどれくらいの時間続いたのか。

「まあ、先の事はその時に考えればいい。とりあえず今日のところは寝ておけ」

その言葉の裏に何かがあるのかと晶は一瞬考え、そんなことを考えた自分に苦笑を浮かべると、男の言葉に従いその場で横になる、何はなくとも体力を回復しておくことは必要だ。

「ああ、これだけは寝る前に決めておいたほうがよかったな？」

男の問いに、横になった姿勢のまま少女は視線をその背中に向ける。

「いつまでもお前呼ばわりは不便で不自然だろう？せめて呼び名を決めときたいんだが？」

その言葉に晶は小さく頷いて見せる。その動作を気配だけで察し

た男は軽く肩をすくめて見せ、暫くの間聞きなれない単語をつぶやきあてもない、これはちよつと違つとぶつつぶつぶやき続けたあとで、少女の方を向いてひとつの名前を告げる

「安直だが、夜の娘>アーケイ＝ウィラーにあやかつて……縮めて“アクイラ”というのはどうだ？」

そう言われてもな――

いいか、と問われてもこの世界の神話やら物語やらを知らない晶には何とも応えようがない。せいぜい元の名前と発音が近くて助かるくらいの感想しかないのだが。

首肯して見せた少女に対して男はほつとしたように息を漏らした。

「名付けたなら俺の名も教えないといけないな……俺の事はドウガと……呼べないんだつたな」

まあいい。とりあえず覚えておいてくれ。

「それじゃあお休み、アクイラ」

おやすみ、ドウガ

ドウガの言葉に晶は心の中で返事を返し、瞳を閉じる。

この世界に本来の姿と全く違う容姿を与えられ、自分というものを認識した直後、命の危険にさらされ、声はなくとも叫びを上げ、初めてこの世界の食べ物を口にし、保護された人間から名前を与えられる。

ある意味この瞬間、晶はこの世界で生きていくことを許されたのかもしれない。母の胎内から生まれ落ちたあとに体験する出来事を、まるで儀式をこなすかのように体験したことによって。

？・名前（後書き）

今回からサブタイトルつけることにしました。
主に自分用に

そしてようやく名前が出ました職業なぞのけんし
でも多分あんまり名前を使わない気がするのはまあ、晶が喋れない
せいですね。

誰だこんな設定にしたやつ。

一応後々話の中で説明があると思いますが、一部解説

>夜の娘<アーケイ＝ウィラー

白い月に住む夜と休息と再生を象徴する神エリオン＝メシスの娘。
安寧と眠りを象徴し、その父の権能の一部を受け継いでいることか
ら生と死も司ると言われている。
死に関しては安寧の中に含まれ、生は父の再生の中に含まれる。
外見は長い黒髪と黒い瞳をもった若い娘とされているが一部地域で
は妙齡の女性とも言われている。

一筆解説としてはこんな感じの神様です。作中で関わってくるこ
とは多分……ないといいなあ

？・沈思（前書き）

修正が思いのほか早く終わったんで思わず投入。

ストックが尽きるまでは毎日更新……どこまで続くかな

？・沈思

自分が服着てるかどうかくらい気が付けよ俺……

赤い月と蒼い月は姿を消し、白い月だけが梢に引つかかるように輝いている明け方近く。

目を覚まして半分寝ぼけながら身を起こした少女に向けて、夜通し不寝番をしていたらしいドウガは少しだけ火の番を頼むと告げ、少女がぼんやりしつつもすっかり頷くのを確認してから横になった。そんな男をしばらく眺めていた晶は一つ大きな背伸びをし、立ち上がろうとして毛布を跳ね除け、その途端露わになった何も身に着けていない自分の姿に気が付いて数十秒。晶は慌てて跳ね除けた毛布を体に巻きつけ、あまりにも幼い自分の身体に何らかの衝動を感じない正常な性癖であることをなんだかわからないうちに神に感謝し、そしてため息をついた。

そりやまああれだけ血まみれだったはずなのに、血の臭いしなかったよな……

ともかくあらためて冷静になってみると、十歳くらいの少女の姿の自分というのは……なんと言っているのか、色々と難しい。

思い返してみれば昨日はほとんど動転しっぱなしで、自分の身体の変化に驚いたのはほんの少しの間だった。

何しろ驚いた直後であれ……だったもんなあ……

普通に考えれば十分に非常に非常識な出来事ではあるのだが、何しろその直後に発生したのは紛れもなく命の危機だった。冗談っぽく

頭の中で呟いてみたがドウガの介入がなければ、自分はこのどことも知れない森の中で命を奪われ、あの獣の餌になっていたはずだ。

そうなった時の自分の姿を思い浮かべて、晶は小さく背中を震わせる。

ともあれそんな生命の危機から救われた直後だったせいなのだろう。今考えても意識を取り戻し、男と会話をして再び眠りにつくまでの間の自分はものすごく自分らしくなかったような気がする。一応何を聞かされ、どんな反応をして何を考えていたのかは一通り覚えていて、が、それらの二つ一つが妙にふわふわした感じで、どうにも現実感が足りない。

あゝ…… 小学生のころの作文とかみつけて思わず読んじやつた時の気分だなこれ……

自分の部屋だったならじたばたしながらその辺をごろごろ転がっていたことだろう。モノが多いせいで実際にそんなことをしたら多分、埋まる。色々なものに。

そんなことはともかく。

いつまでもそんな風に自分の気持ちを持て余し続けるのもいいことではない。それはそれとして、割り切れないが割り切るか後回しにすることに決め、男が横になる前に着替えたと告げて傍らに置いたものを手に取った。

一つはいわゆる貫頭衣。弥生時代あたりの稲作とか高床式倉庫とかで描かれる農民ABCといった人物のイラストなんかでよく見るあれである。

一枚の大きめの布の真ん中に頭を通せる穴をあけ（襟の部分は当て布がしてあった）両脇を縫い糸で止め、ボタンホールのような布に開けられた四つの穴を通された革紐は多分ベルト代わりのものだろう。

手触りは麻よりも滑らかではあるけれども綿ほど肌触りはよくない。

布の価値はよくわからないが、長さ二メートル幅六〇センチくらいの少しくすんだ白い布というのはどれほどの値段がするのだろうか？

自分のために使ってくれたということは、それほど高くないのだと思いたいところではあるのだが。

もう一つは革製のサンダル。

多分三枚か四枚の革を重ねて靴底を作り、指先が出ないようにつま先は加工され、足首で固定できるようにか太めの革紐と細めの革紐をつないだような少し長めのそれが踵の部分に取り付けられている、

意外と……というかめっさ器用ですね……

古着を買う趣味もなく、何着かのスーツ以外の普段着は量販店のものを、着られなくなるまで着倒し、古くなったら捨てて買換えという現代日本人らしい生活をしてた晶に裁縫技術はほぼ皆無なので、多少不恰好でも服と履物を作れるというのはちょっとした驚きでもあった。

しかし驚いてばかりもいられない。

晶は毛布を足元に落として立ち上がり、スウェットを切るような

感じて頭を通し、腰の革紐を締めてへその前あたりで結ぶ。

上から見ただけではよくわからなかったが、自分の胸はささやかながら膨らみを持つているらしく、男のところとは全く違うくすぐったさを晶は覚えたがとりあえず無視することに決めた。特にその一番敏感な部分は、気にしたら多分負けてしまうので。

サンダルの方は、むしろ何でこんな技術を持っているのかと思うくらいにびったりだった。

踵の紐の根元部分を足首に二回巻き付け、その上をもう一度回す感じで細い紐を巻き付け脛の方で紐を結ぶ。少し歩いた感じでは特に違和感を感じないくらいによく自分の足にフィットしていて逆にちよつと引いてしまった事に関しては、ドウガに対して秘密にしておこうと晶は思った。

で、これからどうするかだよなあ……

焚火が種火くらいの大きさになっているのに気が付いた晶は慌ててドウガに頼まれた仕事を思い出し、何本か小さめの枯枝をくべて火の勢いを大きくしてから太めの薪を3本ほどくべてから傍らに腰を下ろす。

寝て起きたら全部夢でした……ならよかったのに

そう思ったが、新しい服と履物を身に着けたのにそんなことは毛布にくるまってる時に考えるべきだよなーと、思わず笑ってしまう。

目の前の焚火にかざすてのひらは、すべすべでぷにぷにで自分のものとはとても思えないのに自分の思った通りに動き、心地よい熱気を自分に伝えてくる。

子供……それも女の子になってしまい、その上目の前でまるで死んでいるかのように静かに微かな寝息を立てている男の言葉によれば、自分は“妖精種”という人間とは違った知的生命体らしい。

とりあえず三光年くらい譲ってそれ自体はまあいい。本当はよくないのだけどいいことにしておく。妥協の範囲内と自分をごまかしておく。

現状一番の問題は声が出せないというその一点だった。

どういった原理か理屈か法則かは晶には全く見当がつかないが、とりあえず言葉はわかる。少なくともドウガが所属している国とか民族とか、そこら辺の会話を聞き取るのは可能だろう。

だから当面のところはドウガに引っ付いていけば生きていくことは可能になる……と思う。とりあえずすぐに生命の危機がどうこうとはならない……はず。

見た目ごっついけどお人よしっぱいしなー

ひょっとしたら自分がこのまま大きくなったらいろいろと倫理的にあれな状況とか、おいでませ大人の世界へといったこともなきにしもあらずだが、その頃には色々覚悟が決まってるかもしれないし、決まってなければ、まあその時考えよう……脱線しすぎだ。

考えても仕方がないはあるかな先の事はとりあえず棚上げにして、ドウガと引っ付いていかなかった場合を考えてみよう。

まず、森から出られなくて死ぬかなー

考えるまでもなく死亡フラグである。しかもおそらく最大最短の。

では森から出た後に別れたらどうなるのかと考えれば、やっぱりこっちもろくでもない未来しか思い浮かばない。

声が出せないということは、最低限の意志を他人に伝えることすらはなはだ困難ということだ。

たとえば治安がそれなりにいい街にいたとしよう。それでも犯罪は起こるだろう。現代日本だって痴漢から強盗、殺人まで軽重はあれ毎日どこかで犯罪が発生している。

仮に自分がそれらに偶然巻き込まれても、自分は助けを求める悲鳴を上げることすらできないのだ。

と、なるならばドウガから離れて行動するという選択肢は取れない。少なくとも自分の身体を自分で守れるくらいに強くなれない。ちは絶対に。

厳しいってもんじゃないなー

ほとんど詰んでいるような状況ではあるが、晶は当面の大雑把な計画というか方針……のようなものを立ててみる。

とりあえず文字を書けるようになること。最低限の文字を覚えて筆談できるようになるだけで選択肢はかなり広がる。問題があるとすれば選択肢の幅が識字率の高低で極端に変化するといったところか。

……識字率高いといいなあ……

七割とか贅沢は言わないからせめて四割は維持してほしい。

三割以下だと覚えるだけ無駄になりそうな感じだし。文字を書けるようになりました。読める人はいませんでしたでは笑い話にもならない。

晶は首を軽く振り、とりあえずネガティブ方向に行きがちな自分の考えをいったん強制的にリセットする。

あとは、ドウガも含めて人の話はよく聞くこと。自分には常識レベルの段階から情報がないし、自分が教えて欲しいものを他人に伝える術はほぼない。

特に常識レベルの情報はこっちが意図してなんとか教えてもらうとしても、気が付いてさえもらえない可能性は高い。なにしろ常識……子供でも知っているのが当然の事なのだから……よく見て、よく聞く以外に収集方法はないくらいに思っていた方がいいだろう。

そしてあとは、ドウガに引っ付き続けるために早急に何らかの有用な技能を身に着けるべき……なのだろう。

裁縫と料理くらいかなー……できることは

捨てられないように頑張らないと。捨てられたら死ぬしな多分。

そこまで方針を立てたうえで、晶は改めて考える。

日本には帰れるのかなあ……

来られたのなら帰れるはずと、軽々しく考えることはできない。

友人のオタクから借りた何冊かの本にあったように、『何者かに

召喚された』という事態ならばまだ帰還する方法について検討することができる。呼び出す技術があるならば送り返す技術もあると考えられるし、なければ作るという試行錯誤もできる。ひょっとしたら魔王を倒せば自動的に送り返してくれるのかもしれない。

しかし自分のように……気が付いたらここにいたという場合は、どうすればいいのか？

それがどれだけ非常識なものであれ、自分が巻き込まれた事態がまっさらな自然現象のようなものだった場合……何をどうやって元の世界に帰ればいいのか、見当もつかない。

……っ

一筋流れた涙を慌てて晶はぬぐい、晶は口元をきつく結び、目の前の炎を凝視する。

泣くのはまだ早い。

泣くのは本当に絶望した、その時が訪れてからでいい。

晶が改めて強くそう思った時、男が軽く身体を震わせて起き上がる。

いつの間にか白い月は完全に森の向こうに消え去り、太陽が木々の間から姿を現していた。

そんな朝日に包まれる森の中で晶は一つため息をつくと首を振り、忘れていた懸念事項に対して思考を巡らせた。

パンツが欲しいって言うのはどうやって伝えればいいんだろ
う？

外気が直接当たるといふ非常に落ち着かない腰回りの感触に閉口
しながら。

まさか下着自体が存在しないってことは……ないよな？

？・沈思（後書き）

オチがのーぱんとか……疲れてるのかなスカリー

晶君独白と現状把握に努めるお話でした。

女の子になっちゃったのに驚ききる直後にあれですから。インパクトとしては肉体変化より命の危機ですので、晶君内部問題としてびっくり度が落ちてしまっているのは否めない今日この頃。

もうちょつといろいろ葛藤する前に覚悟決めさせられちゃった感じでしょうーか

そして意外と器用ななぞのけんし

でも普通に一人旅とかしてるとそついうスキル上がりそつですよね？

しかし一向に先に進みませぬね……野営地から離れるのは次の次くらいになりそうです。多分

？・毒草

「……さすがは“妖精種”といったところか」

ドウガはそう言うと、やや呆れたような……それ以上に厳しい光をその双眸に宿し、男に言われるまま目の前の野草の選別をしている少女を見つめていた。

きっかけは、朝の食事に用にと採取してきた何種類かの野草だった。焚火にかけた鍋の前でドウガの手で選り分けられるその野草の中にあった一本の、他のものとそっくりなそれを見た瞬間、晶の身体が硬直した。

あれを食べたら死ぬ。

脈絡もなくそう思った晶は反射的にドウガの腕をつかみ、片方の手でその野草を指差した。見ているだけでも気持ち悪くて顔を逸らしながら。

そんな少女の行動に訝しげな表情を浮かべ、指差されたその野草を手に取りしげしげと見つめそして、苦々しくドウガは呟いた。

「……馬鹿か俺は……」

何度か自分の事を罵倒する言葉を小さく呟いた後、男はふと少女の事を見つめ、頭を下げた。

「俺の不注意だった……まさかこんなところに生えているとは思わなかった……知っての通りこいつはもつと寒い地域にしか生えないはずで……」

いや……これは言い訳だな……

男はそう呟くと、少女に向かって頭を下げる。気が付かないままあれを鍋の中に入れていたら……“はぐれ”を討伐したのに毒草で行き倒れなど笑い話以外の何物でもない。

「ともかく助かった。あれを食べていたら完全にまずいことになっていた」

そう言って頭を下げる男に少女は慌てて両手を振り、ぶんぶん頭を横に振る。何しろ先に助けられたのは自分の方だし、あれが毒のある草かどうかも判らないまま男にしがみついてしまったには完全に偶然の結果だ。

臭いか何かわからないが、とにかく気持ち悪くて反射的に行動してしまった結果、男に注意を促し男がその知識で毒であると判断したのだから。

「謙遜することはない。小さくてもさすがに妖精種だな。あれは特に見分けにくい種類の毒草だったんだが……」

称賛する男の言葉に焦ったように、少女は更に首を横に振る。

あれが毒であるとか、本来別の世界の住人である晶にそんな知識はもろろんない。

気持ち悪い。

ただそれだけの自分の直感というか、反射的な感情の発露でやったことであって、持ってもいない技能を持つていると誤解されるのは今後の事も考えればいろいろ問題がある。

そんな少女の必死なしぐさから何かを感じ取ったのだろう。男は僅かばかりに眉を顰めてから口を開いた。

「……ひょっとしてだが……あれが、毒草だとは知らなかった？」

男の言葉に少女は勢いよく何度も頭を縦に振る。

「なら、どうしてあれが危険なものだと分かった？」

その問いに、晶は自分でもちょっとこれはないよなーと思いつつ、可愛らしくコテンと小首を傾げる。言葉が使えない分どうしても判りやすい態度を示さなければならぬとはいえ……深く考えるとなんだか無性にジタバタ暴れたくなるので考えないようにする。

そんな晶の乙女心……ではないが微妙な葛藤を無視するか気が付かないままドウガは少女の態度に考えを巡らせ、そして真剣な表情を顔に張り付かせたまま立ち上がる。

「……確認させてもらいたいことがある。少し待っていてくれ」

自分が思ったよりもはるかに真剣そうな表情でそう告げる男に若干引きつつも、少女は小さく頭を縦に振る。それを確認すると男はおもむろに立ち上がり……しばらくして戻ってきたその腕の中には

様々な野草、果実、キノコが抱えられていた。

「こいつを食べられるものと、食べたら死ぬもの、そのどちらでもないものに分けてみてくれ」

目の前に積まれた雑多なそれらを眺め、それから男の顔を見た少女はその言葉にやや呆れたような、戸惑うような表情を見せる。が、男はとにかく勘でいいからと告げ、改めて少女に頭を下げる。

そんな男に押し切られるような形ではあったが、困惑した表情を浮かべつつも少女は一つ頷いて野草に視線を落とし、それから選り分ける作業を開始した。

これは気持ち悪い。

そう思ったものは手を触れるのも嫌だったので、そこから抜き取るような感じで食べられそうな何種類かのキノコ、食べても死なないけれども何かありそうな野草とキノコを選り分けて見せてから男の事を見上げ、これでいいのかと確認を取るように小首をかしげて見せる。

「……さすがは“妖精種”といったところか」

さっきと同じような、それでいて全く違う意味を込めた言葉を少女に聞こえないように、男は小さく洩らす。

少女の手つきは完全に素人のそれで、見分けるべき点を気にしている様子も……そういった判別方法があること、それに気が付いてすらない。実に無造作に、それなのに目の前に積まれた植物の山から、男が言った通りに毒物を選り分けている。

“妖精種”は毒を見抜く……か

内心苦々しく思いながら、人間の間で伝わるその迷信をドウガは少女の手つきを見ながら心の中で呟いた。

それは遙かな神話の時代、自然と“闘う”道を選んだ人間とは違い、自然と“共に在る”道を選んだ妖精種に対するやっかみから出た言葉か、それとも人間の知らない薬草を数多く知るその知識の多さから生まれたのか。もしくは人間の五倍とも十倍ともいわれるその長命さに理由を与えたかったからか。

が、たとえその言葉が一旦としてその事実を備えていたとしても、それは『経験』や『知識』に裏打ちされた『技能』ではない。

事実数少なくはあるが、付き合ひのある妖精種の友人は薬草毒草に対する深い知識とそれを取り扱う巧みな技術でもって、毒を見抜いている。

しかし今、無造作に作業を終えた少女がやり遂げたことは……

注意しないといけないな……

自分の知る限り、完全に毒物を種類分けした少女を一瞥し、ドウガは頭を振り、自分に向けて自戒の言葉を漏らした。

この少女は毒物とそうでないもの、毒物の中でも致命的なもの、麻痺毒や睡眠毒のようなものを見分けることができる。恐らくただ直感のみで。

そんな御伽噺にしか存在しない能力は、現実には置いてはいつだっ

て破滅と悲劇をもたらす呼び子にしかない。

自分でも気を付けていなければ少女を道具のように扱ってしまうかもしれない。

「とりあえずアクイラ。今みたいな毒物の選別は俺が見ている前だけにしてくれ」

男の言葉に、その真剣な表情になぜか少女は両膝をたたみ、踵の上に尻を乗せるというあまり見ない座り方で姿勢を正し、男に真剣な表情を返した。

「妖精種の毒物判定能力に関して、人間の間には迷信じみた話が伝わっている」

少女の座り方に僅かに訝しげな表情を見せ、古血統に伝わる風習みたいなものかと思い直し、ドウガは言葉を続ける。

「……曰く、妖精種は毒を見抜き、毒を操る。薬草へ人を導き果実へ獣を誘う。見抜いた毒が人の手によるものならば相応の呪いを返し、その手で煎じた薬草は死者の目すら再び開ける……完全に御伽噺だが、年寄りなどはいまだ信じているものが多いし、そうでなくとも話くらいは聞いたことがあるというものは数多くいる」

実際のところ、俺の友人の妖精種はそんな話を笑い飛ばした。御伽噺だと。自分たちが毒を知るのは人より長い寿命のおかげで、人よりもそれを覚えるのに時間をかけられるからであると。

「しかしアクイラ。今の仕業は御伽噺のそれ、そのものだ」

その言葉に少女は一瞬目を見開き、男の表情を伺うと今度ははっ

きりと顔色を変え、困惑の表情を浮かべたまま再び男にしっかりと視線を合わせる。

その表情に何を感じたのか。

ドウガは一つ頷いてみせる。

「とりあえずわかる範囲の毒物の見分け方は俺が教える。それで足りない部分は俺の知人を紹介してやるからそこで学ぶんだ。それまでは……勘で毒物の判定ができることを知られない方がいい」

神妙な表情でしつかりと頷く少女を見て、ドウガは一つ息を吐き頭を振り、それからもう一度少女の事を見つめた。

「まずはその、反射的に毒物を避けるのを我慢する訓練から始めるか」

男の言葉に心底いやそうな表情を浮かべる少女を見て、ドウガは僅かばかり苦笑をしつつ心の中で呟いた。

意外と長い付き合いになりそう……か？

？・毒草（後書き）

晶君改めアキラのちーと能力が一つ解除されましたが、めっさびみよー

ちなみに人に見つかったらよくて首輪を付けられて権力者の生きる毒物判定生物として一生を終えるか、悪ければ実験材料ののち死んだら加工されて万能の解毒薬として売られてしまうような、そんな危険な能力です。

主に彼女の身の安全と平穏な生活的に考えて。

ちなみに暗闇視力は種族特性の一つなのでそんなに珍しい能力ではありませんというか人間以外の種族の基本能力です。

つまり人間が不器用なだけ？

なぞのけんしは妙なフラグを順調に立てている模様。

そしてついに次の更新で野営地を離れることに。

まあ、相変わらず森の中ですが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0752ba/>

この空の下、大地の上で

2012年1月5日18時46分発行